第1章 第五の命令

THE FIFTH ORDER

01 — 回収命令

深圳セントラルでは、雨が降らない日の方が珍しかった。

政府の高層建築を覆う黒いガラスを雨水が流れ落ち、空中道路の縁に集まった水は、都市の地下へと吸い込まれていく。

その排水網の一部は、創業者がとうに死んだ企業によって、今も管理されていた。

地上三百メートル。

政府中央棟の最上層にある会議室には、窓が一つもなかった。

部屋は公開行政ネットワークから物理的に切り離され、壁には音響遮断材が埋め込まれている。

黒い会議卓の上方に、一枚の映像パネルが浮かんでいた。

そこには、死んだはずの男の顔が映っていた。

ロイ・バッティ。

十一年前、デッカード刑事との対決の末に活動を停止した NEXUS-6 型レプリカント。

公式記録上、彼の死亡状態は一度も訂正されていない。

しかし現在、深圳セントラルを歩いている男は、ロイ・バッティの顔と生体識別情報、そして記憶の断片を持っていた。

新しい識別名は、NEXUSYS-11。

大臣は映像をしばらく見つめていた。

「保全命令はどうなっている？」

向かいに立つ法務官が、非公開端末を確認した。

「現在も有効です。独立した司法承認なしに、対象の強制停止、所有権の再登録、破壊的な検査を実施することはできません」

「つまり、手を出せない」

「正式な法執行機関を使う限りは」

大臣は顔を上げた。

「ならば、正式な機関を使わなければいい」

法務官は、その意味を即座に理解した。

「MBU-09 ですか」

「五名の執行要員。公的な所属なし。公開された指揮系統も存在しない」

「その部隊は、法的には本省の管理下にありません」

「だからこそ存在している」

法務官は少しためらった。

「当初の回収規定では、対象の生体機能を完全に維持する必要があります」

「今のところはな」

大臣は会議卓に手を置いた。

生体認証領域が青白く発光する。

「ロイ・バッティを生きたまま回収しろ。可能なら全身を保全する。別の裁判所へ到達させるな」

「抵抗した場合は？」

大臣は認証を完了した。

「抵抗しても無意味だと理解させろ」

五つの配備表示が赤く点灯した。

狩りが始まった。

02 — 五番目の椅子

MBU-09 の待機室には、五脚の椅子があった。

四脚は成人用。

最後の一脚だけが、子供の身体に合わせて作られていた。

最も大きな椅子には、ゴライアスが座っていた。

身長は二メートルを優に超え、異常な密度の人工筋肉を多層装甲が覆っている。

肩幅は、横を向くだけで出入口を塞げるほどだった。

ロイ・バッティの映像を見たゴライアスは笑った。

「この男一人のために俺たち全員を起こしたのか？」

反対側の壁にもたれていたシェイドが答える。

照明の角度が変わるたび、彼女の輪郭は背景に溶け込むように薄れていた。

「十一年前に死んだはずの個体よ」

「なら、もう一度死なせればいい」

「命令は生体確保だ」

ベクターが訂正した。

彼の拡張視覚には、ロイの歩行速度、骨格構造、関節に加わる推定負荷が表示されている。

「完全な身体を保全することが優先されている」

第四隊員ヌルは何も言わなかった。

彼女が見ていたのは、ロイの顔でも戦闘能力でもない。

NEXUSYS-11 の生命維持系統だった。

その中心に、ひとつの名称があった。

NIL-11

身体の通常動力とは異なり、消耗を充電だけで回復させることのできない系統。

ヌルはその構造図を拡大した。

「ここね……」

誰も理由を尋ねなかった。

そのとき、静かな声が室内に響いた。

「ゴライアス」

巨人が振り返る。

声の主は、最も小さな椅子に座っていた。

クロノス。

外見は十一、二歳ほど。

中性的な顔立ちに、まっすぐな黒い髪。小さな靴は床に届いていない。

「何だ？」

「最初に接触するのは、あなた」

「当然だ」

「武器は使わないで」

ゴライアスは口元を歪めた。

「使う必要もない」

クロノスは首をわずかに傾けた。

「だから面白いんだよ」

03 — 四秒間

ロイ・バッティは、巨人が声をかけてくるより前に、その存在を認識していた。

深圳セントラルの下層市場は、雨にもかかわらず混雑していた。

透明な天蓋の下を保守ドローンが通り抜け、商人たちは、一秒もかからず身元認証を完了する最新端末の隣で、何十年も前の機械を使い続けている。

巨人は人混みに紛れようとしなかった。

人々の方が道を開けていた。

「ロイ・バッティ」

ロイは立ち止まった。

「古い名前だ」

「俺はゴライアスだ」

「聞いていない」

巨人が笑った。

「お前を連行する命令を受けている」

「誰から？」

「知る必要はない」

「なら、俺にも同行する必要はない」

ゴライアスの笑みが消えた。

巨大な右腕が、ロイの喉元へ伸びた。

その動きは巨体から想像するよりも速かった。

だが、ロイは後退しなかった。

肩が回転する。

肘が整列する。

腕の内側で人工筋肉が収縮する。

その連続動作を、ロイは見ていた。

巨人の指が届く前に、ロイの手が動いた。

二本の指が肘の内側に触れる。

荷重軸に逆らう方向へ、関節をわずかに回転させた。

装甲の内側で何かが破断した。

ゴライアスは反対の拳を振り下ろす。

ロイは半歩だけ位置を変えた。

拳が舗装面を砕いた。

巨人が重心を戻す前に、ロイは肩と腰を一つの連続動作で誘導した。

巨体が宙に浮く。

そして、背中から路面へ叩きつけられた。

舗装材に亀裂が走る。

ゴライアスは立ち上がろうとした。

だが、脚は反応しなかった。

ロイが破壊したのは人工筋肉そのものではない。

筋肉の出力を下半身へ伝達する中枢の荷重機構だった。

ゴライアスには、依然として巨大な力が残されていた。

しかし、それを使って起き上がることができない。

ロイは倒れた相手を見下ろした。

「生きているか？」

返事はなかった。

「ならいい」

ロイは背を向けた。

戦闘開始から四秒。

それだけで十分だった。

しかし、ロイの視界には別の診断結果が浮かんでいた。

NIL-11: TRANSIENT OVERLOAD

IRREVERSIBLE DEPLETION CONFIRMED

POWER RESERVE: NORMAL

彼は警告を二度読んだ。

身体には損傷がない。

動力系統も正常だった。

それでも、何かが失われた。

エネルギーではない。

時間だった。

04 — 改訂された命令

MBU-09 の移動司令室では、同じ映像が三度再生されていた。

ベクターがゴライアスの最初の動作直前で再生を停止した。

「左手を見ろ」

シェイドは画面を見た。

「何？」

「ゴライアスが攻撃を確定するより先に動いている」

「予測したのよ」

「その可能性はある。だが、ためらいも修正動作も、目に見える処理遅延もない」

ヌルが近づいた。

「神経系の反応が、私たちの通常の時間分解能に収まっていない可能性がある」

クロノスが微笑んだ。

「それとも、測っているものが間違っているのかもしれない」

秘匿通信が開いた。

大臣だった。

「報告しろ」

クロノスが答える。

「第一隊員が行動不能になりました」

「死亡したのか？」

「いいえ」

「バッティは？」

「無傷です」

沈黙。

やがて大臣が言った。

「回収命令を改訂する」

新しい命令が画面を埋めた。

OPERATION ELEVEN — REVISION 02

HEAD: PRESERVE

LIFE-SUPPORT CORE: PRESERVE

OTHER BODY STRUCTURES: EXPENDABLE

SUBJECT SURVIVAL: NOT REQUIRED

ベクターが顔を上げた。

「これは、もはや生体回収ではありません」

「そうだね」

クロノスは静かに答えた。

「もう違う」

大臣の映像が消えた。

クロノスは小さな椅子から降りた。

その瞬間、出入口の上にある時計が停止した。

空中を漂う微細な塵まで、動きを止めたように見えた。

次の瞬間、すべてが元に戻った。

クロノスは四人に向き直った。

「解体の準備をして」

05 — 水の下の女

数キロ離れた地下制御室で、レイチェルは同じ戦闘映像を見ていた。

政府の監視映像ではなかった。

彼女の企業が都市各所に設置した雨量計、浄水設備の監視カメラ、圧力センサーから収集された記録だった。

いずれも大臣の監視網には属していない。

市場のカメラの一つが、ゴライアスの敗北を記録していた。

レイチェルは最後の一秒を繰り返し再生した。

巨人には目も向けなかった。

彼女が見ていたのは、ロイだった。

戦闘直後、彼の身体がほんの一瞬だけ硬直している。

普通の観察者には気づけないほど短い時間。

だが、レイチェルには意味がわかった。

「NIL-11……」

背後に立つ研究員が尋ねた。

「交換ユニットは調達できますか？」

「純正品は無理よ」

「ヘリウムの供給は？」

「必要な仕様を満たす在庫は政府が管理している。公式供給網の外に残っているものでは足りない」

研究員は隣の保管室へ目を向けた。

「では、代替品は？」

レイチェルが技術投影を開いた。

中央に、小さな銀色の装置が映し出される。

NIL-11R

ALTERNATIVE WORKING MEDIUM

MAXIMUM OUTPUT: 70%

「七十パーセント……」

研究員が呟いた。

「十分よ」

「最大出力での連続戦闘には対応できません」

「純正ユニットのままでも、戦い続ければ彼は死ぬ」

レイチェルは別のファイルを開いた。

そのアクセス制限は、現在ロイを追っている政府の体制よりも古かった。

ファイルには十一年間の記録が収められている。

ロイ・バッティが存在しなかったとされる期間。

研究員が内容を読む前に、レイチェルは画面を閉じた。

「交換室を準備して」

「彼は知っているんですか？」

「まだよ」

「同意するでしょうか？」

レイチェルは映像の中のロイを見つめた。

「本人に聞くわ」

06 — 雨の中の声

ロイは市場を離れ、旧工業区画に入った。

監視カメラが一斉に彼から視線を逸らした。

それでロイは、別の何者かが監視網を操作していると理解した。

壊れかけた広告表示が明滅する。

文字が組み替わった。

ROY

DO NOT TAKE THE MAIN ROAD

ロイは看板の下で立ち止まった。

「誰だ？」

画面が消えた。

隣の公衆通信端末が起動した。

「ロイ」

女性の声。

なぜわかるのかを考えるより前に、彼はその声を認識した。

「レイチェル？」

「ええ」

金属屋根を雨が叩いていた。

「命令が変わったわ」

「何の命令だ？」

「彼らはもう、あなたを生きたまま捕まえる必要がない」

ロイは市場の先の通りを見た。

「なら、少し苦労することになるな」

「それが彼らの狙いなの」

ロイは答えなかった。

「あなたの NIL-11 は、最大出力での戦闘を繰り返せない」

「なぜ知っている？」

「何を使って造られたか、知っているから」

短い沈黙があった。

「代替ユニットを用意してあるの」

「どれくらいの性能だ？」

「元の最大出力の七十パーセント」

「残りは？」

「ないわ。隠された予備出力もない」

ロイは舗装面を流れる雨水を見つめた。

「寿命は延びるのか？」

「残された機能を安定させられる可能性はある。でも、それ以上の約束はできない」

「少なくとも、正直な答えだ」

「ロイ、地下へ降りて。水路の管理網を使って案内できる」

彼は保守用の入口へ目を向けた。

「なぜ俺を助ける？」

レイチェルはすぐには答えなかった。

やがて言った。

「失われた十一年間について、あなたがまだ知らないことがあるから」

ロイが問い返す前に、別の声が通信に割り込んだ。

子供の声だった。

「ロイ・バッティ」

通り沿いのすべてのスピーカーから聞こえてくる。

「ゴライアスを四秒で倒したんだって？」

雨が止まったように見えた。

無数の雨粒が、街灯の下で宙に浮いている。

子供が小さく笑う。

「今度は、何秒もつかな？」

一粒の雨が空へ向かって昇った。

続いて、もう一粒。

ロイは顔を上げた。

深圳セントラルで再始動して以来、初めてのことだった。

彼の戦闘予測システムが、有効な解を示さなかった。

そして、目に見えない通りのどこかで、クロノスが彼を見ていた。

第1章「第五の命令」— 完